

## 【訳注研究】

『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』 試訳 (3)  
—輪廻には真髓が無いという功德—

渡 邊 温 子

## 1. はじめに

本試訳は『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号に掲載された試訳に続くものである。今回訳出を試みた『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記 (*rJe btsun chen mo mid la ras pa'i rnam thar zab mo*)』は、ミラレーパ (*Mi la ras pa bzad pa'i rdo rje*, 1040–1123)<sup>1)</sup> の直弟子であるゲンゾンレーパ (*Ngan rdzong byang chub rgyal po*)<sup>2)</sup> を始めとする12人の弟子たちによって書かれた、数あるミラレーパ伝の中でも最初期の作品である<sup>3)</sup>。

『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』試訳(1)および『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』試訳(2)で、ミラレーパの前半生に当たる第一部「出自に関して苦行を行じる功德」を訳し終えた<sup>4)</sup>。今回は、第二部「三昧に関して実践を行じる功德」の第1章、「輪廻には真髓が無いという功德」の和訳を試みる。

## 凡例

1. 本和訳に際し、中国藏学出版社刊行の活字本を底本とてオックスフォードとニューアークにある写本と校訂したテキストを使用した。訳内の〔 〕の番号は、中国藏学出版社刊行の活字本の頁番号である。
2. チベット語の表記は拡張ワイリー方式を採用した。
3. 見出しは適宜訳者が補った。
4. 訳内の〔 〕は理解を助けるため、訳者が訳を補った。

## [試訳続き]

## 科文

[p.26] 続いて、三昧に関わる経験の17の功德がある。1. 輪廻には真髓がない

という功德、2. 夢が符牒として現れた功德、3. 楽の暖かさがわかった功德、4. 衣食を求めることから離れた功德、5. 経験が楽として現れた功德、6. 証悟が道として現われた功德、7. 現れが順縁として現われた功德、8. 世間八法が自解脱として現われた功德、9. 問答で負けない功德、10. 恩に報いた功德、11. 偉大な忍辱の功德、12. 神の神となった功德、13. 智慧の灯明が灯った功德、14. 偉大な力の功德、15. 偉大な加持の功德、16. 三昧の能力が円満となった功德、17. マハームドラーを解説した功德である。

### 1. 輪廻には真髓がないという福德

[p.27] まず、輪廻には真髓がないという福德について。〔ミールレーパが〕自分の故郷へ戻ると、父の骨は屑をかぶって家の中にあった。母の骨は家の玄関の敷居のところで灰色になってあった。妹は物乞いに出ており、村中で「魔物がいる」といって、〔ミールレーパの家は〕尋香城<sup>5)</sup>のように成り果てていた。畑は全て枯れ草で灰色になっていた。竈の崩れた壁には、父母の肋骨が明らかに灰色になっていた。一つ城があったのはロバの耳ようになってしまっていた<sup>6)</sup>。いくつかの經典も、結ぶ紐と挾経板が人に持ち去られており、〔それ以外の〕紙の間には雑草が生えていた。昼間は狐と狼がうろつき、夜は餓鬼が悲鳴をあげていた<sup>7)</sup>。

心と見たものに苦しみ、その夜、そこで横になったが一睡もすることができなかった。「さあもう、法を行うことが出来なければ何にもならない」という思いが生じた。夜明け前に、心が惨めで悩んでいる時に、哀哭の道歌をうたわれた<sup>8)</sup>。

「ああ、おお<sup>9)</sup>

輪廻の法を頼っている者たちは  
考えれば考えるほど、幾度も苦しくなる  
行えば行うほど、苦しみが心の底から襲ってくる  
巡れば巡るほど、輪廻の底に投げやられる  
このような心の病の業に囚われる者たちは  
何をなし何をすべきか、法より優れたものはない  
尊者阿闍の本性である持金剛よ  
乞食が山中に留まれるよう加持してください

無常な幻の街<sup>10)</sup>で  
 長い時間、客は心病んでいた  
 故郷、素晴らしいグンタン・ゴルルン・レル<sup>11)</sup>  
 家畜であるヤクと羊と牛とヤギの食べ物である草を  
 今では悪魔が自分の物にしている  
 これも無常と幻の例である  
 この例によっても、瑜伽行者は法を行じる

この四柱八梁の台所は  
 [p.28] 今や獅子の口蓋<sup>12)</sup>のよう  
 四角く八面で九階建ての城は<sup>13)</sup>  
 今やロバの耳のよう  
 これも無常と幻の例である  
 この例によっても瑜伽行者は法を行じる

オルモ<sup>14)</sup>という三角形の畑は  
 今や雑草の故郷と成り果てた  
 味方と期待していた親戚たちは  
 今や敵の軍勢と成り果てた  
 これも無常と幻の例である  
 この例によっても瑜伽行者は法を行じる

素晴らしき父、トゥーパ・セワ<sup>15)</sup>  
 今や粉骨一握りと成り果てた  
 母ニャンサ・カルゲンは  
 今や骨に成り果てた  
 これも無常と幻の例である  
 この例によっても瑜伽行者は法を行じる

供養対象のラマ、堂守のラプムは  
 今や人の召使いと成り果てた

『大宝積経』は

今やネズミの巣の下敷きと成り果てた  
これも無常と幻の例である  
この例によっても瑜伽行者は法を行じる

隣人の叔父ユンペルは

今や忌むべき敵に付いてしまった  
妹のキュンセー・ペンテンマ<sup>16)</sup>は  
今や行方知れず、探す手がかりもない  
これも無常と幻の例である  
この例によっても瑜伽行者は法を行じる

尊者阿闍の本性である恩ある方よ

乞食が山中に留まれるよう加持してください」

とうたわれた。

〔ミーラレーパは〕 悲しい歌をたくさんうたってから、経の中でもまだ文字がはっきりしているものを、〔以前〕 文字を教えてくれたニンマ派の先生に捧げた。〔相手の〕 心を詳しく尋ねたところ、〔ラマは〕 食べ物の一つ与えて<sup>17)</sup>、「お前は今までどこに行っていたんだ！ お前に期待できなかった。人をたくさん殺したことは、お前の母のためにはならなかった。故郷も城も放ったらかしにした！」 [p.29] と言われたので、〔ミーラレーパは〕 ニンマ派の師の前でこの無常の道歌をうたった。

「ああ、輪廻の法に真髓はない  
無常で無常で真髓はない  
変わり変わって真髓はない  
不確か不確かで真髓はない  
故郷があっても主はおらず真髓はない  
主がいても故郷はなく真髓はない  
主と故郷の二つが揃っても真髓はない  
輪廻の法に真髓はない

父はあっても子はおらず真髓はない  
 子はあっても父はおらず真髓はない  
 父子の二人ともが揃っても真髓はない  
 輪廻の法に真髓はない

母はあっても父はおらず真髓はない  
 父はあっても母はおらず真髓はない  
 父母二人ともが揃っても真髓はない

人はいても財がなく真髓はない  
 財はあっても人がなく真髓はない  
 人と財の二つともが揃っても真髓はない  
 幸福と財産が揃っても真髓はない  
 輪廻の法に真髓はない

何をしても苦しみであり真髓はない  
 どんなに集めようとも無常であり真髓はない  
 何を為そうとも幻であり真髓はない  
 全てが揃っても真髓はない  
 輪廻の法に真髓はない

真髓がないという自性に  
 今、瑜伽行者である私が  
 真髓を打ち立てられるだろうか  
 尊者阿闍の本性である持金剛よ  
 乞食が山中に留まれるように加持ください」

とおっしゃったので、〔ニンマ派の〕師は、「是の如きであれば素晴らしい。この村の者たちは〔お前が〕悪魔を奉じて、事を成したと言っている。お前の母が亡くなって、何年も経った。妹は乞食に出てしまった。あの叔母はこの谷の上の方では遊牧民、下では畑を揃えているからそこへ行きなさい。糧食や水として役立

つものを与えてくれるかも知れないが」[p.30]と言われた。

尊者〔ミールレーパ〕も悲しみながら〔ニンマ派の師に〕送られたので、叔母のもとへ登って行った。叔母は長い間無視していたが、暫くしてから、テントの柱を取って、犬に追いかけてさせて叩いてきた。

「乞食め！先祖の魂を売った奴め！村を破壊した奴め！」  
と言って、殴ってきた。尊者は、後ろに退いたので、石に躓いて水たまりに転がってしまった。〔叔母の〕杖の端を掴んで、この道歌をうたわれた。

「悪しき故郷、草の牢獄で  
親戚が敵と立ちはだかった親子三人  
積まれた豆を棒で散らばらせるように  
乞食である私は人の住む地の果てを彷徨う  
母が苦しみの果てに死んだので彷徨う  
妹はどこに行ったのか手がかりもない  
私たち親子3人以上の苦しみはない  
私が故郷に戻ってみると  
心患う悲しみ底から湧いてきた  
親戚に心痛め続け  
あなた、叔母を追って乞食にきた  
罵詈雑言を浴びせられ  
苦しみの痛みが内から起こった  
テントの柱で肉と骨をめためたに殴られ  
身体は痛みの苦しみが沸き立った  
慚愧の囲いが心の底から破れた<sup>18)</sup>  
今、凶暴なきつい目<sup>19)</sup>をしないでください  
私が少し話<sup>20)</sup>をします」

と言われると、〔叔母は、〕

「何を話すと言うんだ！素晴らしい父親に、お前のような息子が生まれるなんて！」  
と言いながら、たくさんの土と砂利を〔ミールレーパの〕顔に投げつけてきた。  
〔ミールレーパは〕 どうにも辛抱が切れて、この道歌をうたわれた。

「叔母のきつい目は魔女だ  
私を殺そうとした魔女だ  
親族としての叔母があったが  
『乞食め！親の魂を売った奴め、来い！』と言い  
犬に『行け！行け！』と言って放し追いかけてさせた  
テントの柱を取って殴ってきた  
丸い石で [p.31] 出迎えて  
土と砂利の雨を降らせてきた  
杖の先で押し付けてきた  
水たまりの中で水浴びをすることになった  
乞食は宝である命を手放すところだった  
どうにもできない親族が敵になった  
脆弱な者の手助けする人は少ない  
叔母の親族には見切りをつけた  
叔母には子どもも財産も幸福も揃っている  
これによって常に守られるように

尊者マルパ翻訳師よ

乞食が山中に留まれるよう加持してください」

とおっしゃり、涙をぼろぼろと流されたので、叔母も恥じ入って、〔叔母が〕少し会話をして、

「お前たち母子が呪術をかけて村を破壊したんだ」

と言って、

「私たちが災厄を行なったならば、恥ずかしく、酷い言葉を放たれるのは報いだ。もう呪術をかけないのならば、畑と家全てを私が買おう」

と言うので、同意して買ってもらい、糧と交換する約束をした。〔叔母は〕食べ物少しばかりも与えて、

「さあ、お前は法を行じにお行き」

と言ったということである。

以上は、先の中間、親族の話である。

## 略号および文献表

gTsang smyon he ru ka rus pa'i rgyan can

rNal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyan pa'i lam ston. 大谷大学図書館所蔵の木版本 (蔵外 no. 11854)。【略号『道説示』】

Mi la ras pa bzhad pa'i rdo rje

Oxford edition: No cover title. No title page. bdu can manuscript in the Bolden library Microfilm Reel No. SN 1207 ms. Tib. a. 11a.

Newark edition: *rJe btsun chen po mid la ras pa'i rnam thar zab mo*. bdu can manuscript in the collection of the Newark Museum, microfilm master negative No. 0001, Tibetan Book Collection, Folio 36.280, Biography of Milarepa, IIB R 16.

*rJe btsun chen mo mid la ras pa'i rnam thar zab mo*. In *rJe btsun mi la ras pa'i gsung 'bum*. vol. 1, dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. 2011.

渡邊温子

2014 『師資相承から見るチベットの聖者ミラレーパの仏教者としての生き方』 大谷大学博士学位請求論文。

2018 『『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』 試訳 (1)』 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』 35 : 143-161。

2019 『『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』 試訳 (2)』 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』 36 : 85-102。

- 
- 1) 現在では一般に Mi la ras pa と綴られる。『深甚伝』 翻訳に関しては Mid la ras pa という表記にもとづいてミラレーパと訳した。
  - 2) ミラレーパの弟子の中心は、四大弟子、親しき八弟子、そしてミラレーパが亡くなる前の六弟子である (拙稿 2014, pp.152-154)。ゲンゾンレーパは四大弟子の一人に当たる。ゲンゾンレーパは、ラサから西に位置するティンリーの出身であるため、『深甚伝』には西の方言が散見する。親しき八弟子のシバウーなども西チベットのシェカル出身である。ミラレーパの弟子は、ミラレーパの故郷の西チベットの出身者が主であり、ガムポパ (sGam po pa hsod nams rin chen, 1079-1153) のように中央チベット東部など他の地方出身の弟子の方が稀であったと思われる (ツルティム・ケサン先生の教示)。
  - 3) 中国藏学出版社刊行の活字本を底本として、オックスフォードとニューアークにある写本と校訂を行なった。校訂テキストは今後公開を予定している。
  - 4) この章はツァンニョン・ヘルカ (gTsang smyon he ru ka rus pa'i rgyan can) によって編纂された『瑜伽自在者たる聖者ミラレーパの伝記—解脱と一切智者への道説示 (rNal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyan pa'i lam ston)』 (以下『道説示』) の6章と7章の一部に相当する。
  - 5) dri za'i grong khyer. 蜃気楼のように幻のごとく現れた城のこと。
  - 6) ロバの耳は、馬の耳のように真っ直ぐではないため、傾いていたの意味か。

- 7) *bshi ring nge*. 助けを求める叫び声のこと。
- 8) *chongs ma dbyangs kyi mgur 'di gsungs so*. ニュアーク版は *chongs*、オックスフォード版は *chong*、活字版は *phyo*. *mchong* は『チベット古語辞典』に、「泣いたり遠く叫んだりして歌うことを意味する」とあるため、ここでは *mchong* の *m* が落ちたものとして哀哭の歌の意味でとる。なお、『道説示』ではこの歌のタイトルは付けられず、単に *glu 'di blangs so* とのみある。
- 9) *ang*. 深い哀しみを表す。感情を表す言葉。
- 10) ここではミラレーパの故郷のことを指す。
- 11) *gung thang sgor rung ral*. 地名。グンタンの入り口にある谷のレルという場所。
- 12) *ya kha* とあるが、ここでは *ya rkan* の意味でとる。
- 13) 正方形の上に正方形が乗り、面である壁が8つある2階の建物のこと（ツルティム・ケサン先生の教示）。
- 14) オックスフォード版は *'or mo*、ニュアーク版は *'ur mo*、活字本はここでは *'or mo* だが、22頁では *'ur mo* で取っている。『道説示』は *'or ma* (『道説示』8b) とあり、現在でもこの呼び名が使われている。1959年にはツアルン・バルがオルマを管理していた。「オルマ」という名前から、もともとこの地はオルマ出身の人のものであったが、のちにミラの一族が移り住んで所有したことがわかる。なお、ミラレーパの故郷であるキャンガツァは、現在ではツアルンの下に属している（ツルティム・ケサン先生の教示）。
- 15) *thos pa se ba*. しかし、先の箇所、御生誕の地はグンタン (*gung thang*)、家系はキュンポ (*kyung po*)、父親はミーラ＝シェーラップ・ギャルツェン (*she rab rgyal mtshan*) とあったのと悖る（渡邊2018, p.147）。『道説示』では、「素晴らしき父ミラ＝シェーラップ・ギャルは今は生きた跡もない」となっている（『道説示』57b）。なお、『甚深伝』では、ミラレーパが7歳の時に、父親は他界したとある（渡邊2018, p.147）。
- 16) *khyung za'i dpal 'dren ma*. 先の21頁では、*pe ta'i dpal 'dren*. とある。『道説示』では、*pe ta mgon skyid* と記される。なお、『道説示』に描かれるペタについては、拙稿で論じた（渡邊2014, pp.91-107）。
- 17) *tsa ba gcig gnán. brda dkrol gser gyi me long* に、*tsa ba* とは、「飲食や食べ物の名前」とあるので、食べ物の意味でとる。
- 18) *khrel ngo tsha' rib ma gting nas bkral*. 恥が無くなったの意味か。
- 19) *ru mig*. 鋭くきつい目のこと（ツルティム・ケサン先生の教示）。すぐ後の歌の最初にも *ru mig* の言葉が見られる。
- 20) *bla bo tshig gsum*.

(本研究は JSPS 科研費 JP17K13334 の助成を受けたものである。)

本研究にあたり、大谷大学名誉教授ツルティム・ケサン先生とゲシェー・ラランパであるトゥプテン・ガワ先生から有益な助言と協力を頂きました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

